〔論　文〕

ルネサンス期における
メディチ家の宝物コレクション

松　本　典　昭

はじめに

ルネサンス発祥の地フィレンツェ。そのフィレンツェを支配したメディチ家といえば，ルネサンス美術（建築，彫刻，絵画）のパトロンとして有名であるが，コレクターとしての側面はあまり知られていない。しかも美術品ではなく工芸品のコレクターとしては，ほとんどまったく知られていないのが現状である。世界遺産都市フィレンツェを訪れる観光客も有名絵画の前では人だかりだが，工芸品のある部屋は素通りする。そもそも工芸品の展示してある博物館にさえ足を運ばない。工芸品がわが国に紹介されてこなかったのだから，いたしかたないことである。

ところがルネサンス当時の評価はまったく逆である。たとえば15世紀末のメディチ家が所有していたボッティチェッリの大作《ヴィーナスの誕生》は15フィオリーノほどの評価額しかないのに対して，直径20センチのカメオ《ファルネーゼの皿》は1万フィオリーノという驚異的な評価額だった。工芸品こそが宝物なのである。メディチ家が他国の君主，知識人，芸術家，有力市民などの賓客を自宅に招いて得意満面に見せびらかしていたのは，美術品ではなく工芸品＝宝物のほうである。メディチ家は宝物のコレクターとしてネットワークを広げ，ときには贈答品のやりとりを通して社会的な地位を上昇させていったのである。

ここでまず，本稿であつかうメディチ家の人びとについて簡単に紹介しておきたい。

ムジェッロ地方の田舎から出てきたメディチ家がフィレンツェの記録に初出するのは，13世紀初頭のことである。その後，急速に力をつけるが，発展の基礎を築いた始祖は，1397年にメディチ銀行を創設したジョヴァンニ・ディ・ビッチ（1360–1429）である。彼はフィレンツェ第3位の金持ちに成り上がったが，その長男コジモ・イル・ヴェッキオ（1389–1464）はフィレンツェで第1位，ヨーロッパでも有数の大富豪になり，1434年に市政を掌握した。その長男ピエロ・イル・ゴットーゾ（1416–69），その長男ロレンツォ・イル・マニフィコ（1449–92）と3代にわたってフィレンツェ・ルネサンスの「黄金時代」を築きあげた。

この時期の宝物室は，コジモが建てたメディチ邸2階のマギ礼拝堂に隣接する，約4メートル×約5メートルの，窓のない，小部屋「スクリットイオ（書斎）」である。この「スクリットイオ」は宝物の数々を収納展示していたので，16世紀以降のヨーロッパ諸宮廷における「驚異の部屋（ヴンダーカンマー）」の手本のひとつになるものである。いかにすごいコレクションだったかは，建築家フィラレーテ（1400–69）が，じっくり鑑賞するには1カ月かけても足りないほどだ，と賛嘆していることからもわかる。16世紀のヴァザーリはまだ鑑賞の機会をえたが，残念ながら現在は跡形もない。部屋を飾っていたルカ・デッラ・ロッビアの円形テラコッタ製の12点の《月暦》なども，現在はロンドンのヴィクトリア＆アルバート美術館に移っている[1)]。

ロレンツォの長男ピエロ・イル・ファトゥオ（1472–1503）は1494年，フランス王の侵攻を機にフィレンツェから追放される。メディチ家は

無断転載禁止

1512年に復帰，1527年に再追放，1531年に再復帰。この激動の時代にメディチ家から2人の教皇が出る。教皇レオ10世（在位：1513-21）と教皇クレメンス7世（在位：1523-34）である。

教皇クレメンス7世は庶子のアレッサンドロ（1511-37）をハプスブルク家の皇帝カール5世（在位：1519-56）の庶出の娘と結婚させる一方，ピエロ・イル・ファトゥオの孫娘カテリーナ（1519-89）をヴァロワ家のフランス王フランソワ1世（在位：1515-47）の息子と結婚させた。銀行家という「商人階級」の出身者が皇族や王族と姻戚関係を結んだのだから，メディチ家の国際的な地位はいよいよ高まった。

1531年，皇帝カール5世の肝煎りでアレッサンドロが初代フィレンツェ公になった。しかし彼は1537年に同じメディチ家の一員によって暗殺され，残る直系子孫はフランスに嫁いだカテリーナ（カトリーヌ・ド・メディシス）だけとなる。ここまでが本稿のあつかう範囲であるが，本稿ではあと3人名前が出てくるので，その後の3人も紹介しておきたい。

初代フィレンツェ公を継いだのは，コジモ・イル・ヴェッキオの弟ロレンツォ・イル・ヴェッキオ（1395-1440）から数えて5代目の子孫コジモ1世（1519-74）である。彼は1537年に第2代フィレンツェ公，1569年に初代トスカーナ大公となる。その長男フランチェスコ1世（1541-87）が第2代トスカーナ大公，その弟フェルディナンド1世（1549-1609）が第3代トスカーナ大公である。以上が主要登場人物である[2)]。

コレクション研究の一次史料はフィレンツェ国立文書館に保存されている複数の財産目録である。15世紀のメディチ家（「兄脈」）の財産目録は，1417年，1456年，1465年（評価額記載あり），1492年（評価額記載あり）の4点がある。いちばん重要なのは4番目のもので，これは1492年にロレンツォが死去した直後に作成されたが，1492年のオリジナルは消失し，現存するのは1512年の写しである。この写しは，ピエロ・イル・ファトゥオの長男ウルビーノ公ロレンツォ（1492-1519）が司祭シモーネ・ディ・スタジオ・ダッレ・ポッツォに1512年12月23日に作成させたものである。1512年はメディチ家復帰の年であり，すでに四散していた財産を記録しておく必要が痛感されたのだ。これには重量と評価額が記されている[3)]。

重量単位の1リッブラは339. 54グラム。1リッブラ＝12オンチャで，1オンチャは28. 29グラム。貨幣単位の1フィオリーノは3. 536グラムの純金のフィオリーノ金貨1枚分である。1フィオリーノ＝20ソルド。1ソルド＝12デナーロ。したがって評価額が「f. 1. 10」と書いてある場合には，「1フィオリーノ10ソルド」の意味になる。

ところがこうした財産目録は別邸や別荘やいくつかの部屋の記述が欠けているので網羅的でないうえに，略記や誤記も少なからずある。政治的変遷のなかで四散し消失した宝物は数知れない。致命的だったのは1494年と1527年のメディチ家追放，18世紀半ばのメディチ家断絶，19世紀初頭のナポレオン軍の略奪である。

また現存する宝物も数世紀にわたって手が加えられたり保管場所が転々としたりした結果，目の前にある現物と無味乾燥な財産目録の文字の羅列とを照合する作業は困難をきわめる。メディチ・コレクションの研究はようやく緒についたところであり，次々に新しい研究成果があらわれて研究史を塗り替えている最中である。

1　コジモ・イル・ヴェッキオの古代趣味と意外な豪華趣味

15世紀のルネサンスはキリスト教以前の古代を発見した時代である。それは時間の発見であり，時間的に離れたモノほど稀少価値があった。人びとは古代の「驚異」を求め，古代ローマ最盛期の五賢帝のひとりハドリアヌス帝（在位：117-138）のコレクションを理想と称えた。王侯貴顕や上層市民はこぞって古代遺物を蒐集することに熱狂し，修道院に眠る古典写本，遺跡から発掘される古代のコインやメダル，さらには貴石製の容器や彫玉が蒐集の対象となった。中

無断転載禁止

世の清貧の思想に対して，古代の豪華趣味がしだいに復活していったのである。

15世紀初頭のフィレンツェでは古代品に取り囲まれて「古代の美しい器で食事」をとり，古代人のように優雅に暮らした人文学者ニッコロ・ニッコリ（1364-1437）の存在がよく知られている。彼のまわりにはたくさんの人文学者や芸術家が集まって美術工芸品を鑑賞したり，会話を楽しんだりした[4)]。コジモ・イル・ヴェッキオは25歳年下だったが，ニッコロ・ニッコリの親友であり，古写本や古代遺品の蒐集に資金を融通する仲だったが，融資の担保にモノを受け取ることも少なくなかっただろう。実際，ニッコロは借金のカタに約800冊の蔵書をコジモに遺贈し，コジモはその写本を収蔵するためにサン・マルコ図書館を開設した。

古代品の蒐集にはまずもって古典の教養が必要であり，メディチ家のなかで最初に古典の教養を身につけたのがコジモ・イル・ヴェッキオだった。1418年，58歳の父ジョヴァンニがわずか3冊の宗教書しか所有していないときに，29歳のコジモはすでに70冊以上の書物を所有していた。もちろんグーテンベルクの印刷術発明以前のことであり，書物が目の飛び出るほど高価だった時代の話である。15世紀初頭のフィレンツェには共和国書記官長を中心にした人文学サークルがあって，古代熱狂が勃興しつつあったのだ。1426年のローマ旅行もコジモの蒐集品を増やす好機だったはずである。

コジモの銀行家としての堅実さ，政治家としての老獪さ，人文学者としての賢明さについては，15世紀のフィレンツェ工房で製作された貝殻製カメオ《コジモ・イル・ヴェッキオの肖像》（銀器博物館）が如実に示している。

コジモが所有していたことが確認される最初の彫玉は，紅玉髄製のインタリオ《アポロンとマルシュアスとオリュンポス》通称《ネロの印璽》である。ヴァザーリは所有者としてコジモの次男ジョヴァンニ（1421頃-63）の名をあげているが，1428年頃にジョヴァンニは8歳前後なので，ジョヴァンニ説は無理がある。これはコジモが所有したあと，ピエロ，ロレンツォに引き継がれたので，後述することにしたい[5)]。他にコジモが所有していたカメオは《月桂冠を戴くネロの肖像》である。

ラルガ通りにメディチ邸が着工されたのは，1444年，コジモ55歳のときである。コジモは，この邸宅の建築費として，同時代の書籍商ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチ（1421-98）が見積もった6万フィオリーノよりも高い10万フィオリーノを投じた[6)]。

一般にコジモは質素で禁欲的な人物と思われてきたし，実際，コジモ自身，そう思われるように慎重にふるまったフシはあるが，建築家フィラレーテによれば，彼の建てた豪邸は乳白色に輝く雪花石膏の屋根をもち，赤色の斑岩と緑色の蛇紋石でおおわれていた。アルベルト・アヴォガドーロもコジモの建てたフィエーゾレのバディアを雪花石膏と斑岩と蛇紋石の建築的ファンタジアと表現している。斑岩と蛇紋石は，古代の皇帝を象徴する石材であり，見る者に畏敬の念を起こさせたはずである。1459年4月（邸宅の建設が終わり，礼拝堂の装飾が始まる直前），コジモは新築のメディチ邸に教皇ピウス2世（在位：1458-64）とミラノ公フランチェスコ・スフォルツァの息子ガレアッツォ・マリア（1444-76）を迎えた。15歳のガレアッツォ・マリアは邸宅に感嘆して次のような手紙を書いている。

「書斎，礼拝堂，客間，寝室，庭園，すべてが驚くべき技量で建設され装飾されています。金やみごとな大理石，彫刻や浮彫，最高の匠が遠近法を駆使した絵画や象嵌細工で，邸宅の長椅子や床にいたるまで，全面が美しく飾り立てられています。タペストリー，金や絹を使った調度品，銀器，書棚，と数えあげればきりがありません。」

このときコジモは2人を歓待するために，シニョリーア広場で動物の戦いのスペクタクルを開催した。雄豚，馬，雄牛，水牛，山羊，雌牛，子牛につづいて，コジモ自身が私費で都市から借り出した26頭のライオン（フィレンツェの守

護神である軍神マルスにちなんだ「マルゾッコ」と呼ばれるライオン）が大歓声のなかを入場した。だが飼育されたライオンは生け贄になるはずの動物に興味を示さないばかりか，居眠りまでする始末だった[7]。観衆の期待した血なまぐさいスペクタクルは落胆に終ったが，コジモが「パンとサーカス」を提供したローマ皇帝の見世物を再現しようとしたことは明白である。

コジモが埋葬された場所は，コジモの指示どおり，メディチ邸の向いにあるサン・ロレンツォ聖堂の身廊と翼廊が交わる交差部の下であるが，墓所を示す円形の墓標にもやはり白大理石と赤色の斑岩と緑色の蛇紋石が使用されている。墓標のデザインはイスタンブルのハギア・ソフィア大聖堂の床のデザインによく似ているが，その交差部という場所は歴代皇帝が戴冠式をあげる場所だったことは示唆的である[8]。この墓標は1464年から65年にかけてヴェロッキオが制作した。コジモの古代趣味と意外な豪華趣味が垣間見られるのではなかろうか。

2　ピエロ・イル・ゴットーゾの聖遺物容器

15世紀の「驚異品」は古代遺物だけではない。15世紀は厳然たるキリスト教社会であり，そうした社会にあっては中世以来の聖遺物が聖性を有する何よりの「驚異品」であった。ルネサンス期はキリスト教の信仰と異教古代の文化がせめぎあい，かつ融合した時代である。ブルネッレスキが大円蓋を完成したルネサンスのシンボルともいうべきサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の献堂式（1436年3月25日――3月25日が当時のフィレンツェ暦の元日だった）は，コジモ・イル・ヴェッキオが市政を掌握して2年目のことであったが，そのときフィレンツェ滞在中の教皇エウゲニウス4世（在位：1431-47）は中央祭壇に洗礼者聖ヨハネの指の骨と聖ゼノビウスの頭蓋骨を陳列してミサを執り行った。洗礼者聖ヨハネはフィレンツェの守護聖人，聖ゼノビウスは初代フィレンツェ司教である。

コジモの長男ピエロの財産でもっとも重要な貴重品は，絵画でも彫刻でも古代遺物でもなく，《リブレット聖遺物容器》（大聖堂付属博物館）である。この聖遺物と聖遺物容器には長い歴史がある。まず十字軍を主導したカペー朝のフランス王ルイ9世（在位：1226-70）いわゆる聖王ルイが，1230年代から40年代にラテン帝国最後の皇帝ボードワン2世（在位：1228-61）から大量の聖遺物を購入し，それを安置するために1248年，パリにサント・シャペル聖堂を建立した。その後，ヴァロワ朝のフランス王シャルル5世（在位：1364-80）が，1371年に弟のアンジュー公ルイ1世（在位：1360-84）に聖遺物の一部を贈り，別の弟ベリー公ジャン1世（在位：1360-1416）に聖遺物の他の一部を贈った。このベリー公ジャンはランブール兄弟に『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』を製作させた有名なパトロン・コレクターである。

アンジュー公ルイに贈ったほうの14世紀の聖遺物容器は，中央に一連の受難具の断片，左右に72人の聖人の聖遺物断片が配置されている[9]。折り畳んで開閉できる形状から「リブレット（小冊子）」という通称がついた。

アンジュー公ルイが1384年に死去したあと，どういう経緯があったものか，ピエロ・イル・ゴットーゾの手に渡った。メディチ銀行はフランス王にも融資していたので，返済不能となった融資の担保だった可能性も考えられる。ヴァロワ家のフランス王ルイ11世（在位：1461-83）がピエロに王家の百合の紋章「フルール・ド・リス」（この聖遺物容器にも付いている）の使用を許可した1465年と同時期に贈られた可能性が高い。なぜならこの聖遺物容器にはアンジュー家以来の由緒書きが付いているが，メディチ家にいたるまで他の所有者の手を経由していないことが明らかだからである。

メディチ家が所有してからフィレンツェ人の職人パオロ・ディ・ジョヴァンニ・ソリアーニ（1455-69）が，この聖遺物容器を収納するためにさらに建築物型の聖遺物容器を製作した。

無断転載禁止

15世紀後半の聖遺物容器が内部の14世紀の聖遺物容器を見えにくくしてしまったうらみがあるが，ともかく，もとの聖遺物容器自体が聖遺物化した稀有の例である。容器内の聖遺物を列記してみると，キリストの身体から流れた聖血，荊冠，聖十字架，聖槍，最後の晩餐のテーブルの聖布，最後の晩餐のときにキリストが着ていた聖衣，幼児キリストの繦，聖骸布，モーセの石板，モーセの海綿，キリストが縛られた鎖，釘，柱，鞭……[10]，とまあ，たいへんなものである。この《リブレット聖遺物容器》が1465年の財産目録で最高額の1500フィオリーノと評価されているのも不思議ではない。信仰心の篤さと工芸技術の高さの表れである。この聖遺物容器はメディチ邸マギ礼拝堂の祭壇の上に置かれて，ベノッツォ・ゴッツォリの壁画やフィリッポ・リッピの祭壇画に負けない圧倒的な存在感を示して燦然と輝いていた。

ピエロの聖遺物容器で次に重要なのは，「ビッキエーレ（コップ）」の通称のある《荊の聖遺物容器》（サン・ロレンツォ聖堂）である。かつては実際に典礼用のコップだった可能性がある。15世紀の聖遺物容器の高さは9.7センチであるが，容器を顕示するために，18世紀初頭にジョヴァン・バッティスタ・フォッジーニの下絵に基づきコジモ・メルリーニが製作したバロック様式の2体の銀製天使像が付け足されたので，全体の高さは31.9センチになった。天使の台座に使われている紫水晶は聖フィアクルの遺品から切り取られたものである。

15世紀の水晶製容器（ビッキエーレ）の台座にも金とエナメルを組み合わせた見事な3人の猟師の装飾が施されている。エナメルは七宝焼きのことであり，ガラスと同じ原料を使用する。緑色には銅，青色にはコバルト，赤色には鉄，紫色にはマンガンなどを混ぜ合わせて焼成するので，カラフルな造形が可能である。当時，製法は秘密にされていて，フランス中東部のブルゴーニュ地方に特有の技術だった。1465年の財産目録では700フィオリーノと評価されているが，1492年の財産目録にはさらに次のような詳細な記述がある。「水晶製ビッキエーレ。金装飾のある水晶製の蓋付き。台座には6個のサファイアとバラスルビー，そのあいだには12個の大粒の真珠，さらに3人のエナメル製人物像のそれぞれに3個のルビーと3個の真珠が配されている。蓋には7個のサファイアとバラスルビー，14個の大粒の真珠と27個のルビーがあり，それらのルビーのあいだには12個の真珠があり，尖端にはダイヤモンドが配されている。重さ3リッブラ4オンチャ。価値800フィオリーノ。」豪華絢爛のきわみであるが，尖端のダイヤモンドは失われているし，実際の装飾とも多少相違があるようである。1532年にサン・ロレンツォ聖堂に寄贈されたときには聖カタリナの指1本が納められていたが，1709年に荊冠の棘がフィレンツェにもたらされると，棘に取り替えられた[11]。この棘は前述の聖王ルイがコンスタンティノープルから持ち帰り，ベリー公ジャンに贈った由緒あるものだった。現代人には「指1本」のほうが「棘1本」よりもインパクトがあるが，18世紀初頭にはキリストの身体に接触したものほど聖性が高く，それだけ価値が高いと信じられていたのだ。

3　ピエロ・イル・ゴットーゾの貴石製容器

貴石製の容器でもっとも古いコレクションのひとつは，ピエロが所有していた赤碧玉製の《2つの把手と蓋のある壺》（銀器博物館）である[12]。丸みのある一連の壺のなかで，石の切断面が平面である点に特徴がある，高さ27センチの壺である。1464年のピエロの財産目録のなかで130フィオリーノと記されている。壺自体はおそらく14世紀から15世紀のヴェネト地方で作られ，これにメディチ家が金属装飾を追加させた。装飾のなかにメディチ家の紋章である6つの玉が確認できる。

白いまだらのある赤碧玉という素材と把手の形状がこれとよく似ているのが，赤碧玉製の《2つの把手と蓋のある壺》（銀器博物館）であ

無断転載禁止

る[13]。上記の壺と同じ時期に同じ工房で作られたものであろう。こちらの金属装飾は，メディチ家お抱えの金細工師ジュスト・ダ・フィレンツェ（1457-67年頃活動）が1465年以前にピエロのために製作した可能性が指摘される1点であるが，その後，装飾は改変された可能性がある。現在は尖端にダイヤモンドのついた指輪，駝鳥の3枚の羽，メディチ家の紋章の赤い玉，ゴシック様式の冠などが付いている。ピエロの息子ロレンツォ・イル・マニフィコの所有物だったことは確実であるが，それが父ピエロの代までさかのぼるかどうか判断し難いのは，このように改変の可能性があるからである。

1456年の財産目録によれば，ピエロの所有する貴石製容器は7点。うち2点は水晶製，4点は碧玉製，1点は玉髄製である。1465年の財産目録では，さらに増えて全部で15点の貴石製容器を所有し，評価額の総計は3760フィオリーノ。うち6点が水晶製で計1280フィオリーノ，7点が碧玉製で計1680フィオリーノ，残る2点が碧玉製で800フィオリーノ。1点あたりでは碧玉製品が高い評価を受けている[14]。

以上は貴石製容器にかぎった分析であるが，別の研究では，1465年の財産目録の全体を分析して，ピエロが所有する宝物を次のように総括している。宝石の総額1万2205ドゥカート，指輪の総額1972ドゥカート，真珠の総額3512ドゥカート，彫玉（カメオとインタリオ）の総額2579ドゥカート，容器の総額4580ドゥカート，珍品希物の総額3600ドゥカート，銀器の総額6702ドゥカート，以上の総計は3万5150ドゥカート。すなわち貴石製品（彫玉と容器）の総額は7159ドゥカートで，全体の約20パーセントに相当する[15]。

フィオリーノとドゥカートはほぼ同価値なので，上の研究の貴石製容器3760フィオリーノと下の研究の貴石製容器4580ドゥカートの食い違いをどのように説明できるのかはわからない。ただ，個別の数値はともかくとして，全体としての比例をみるかぎり，2つの研究結果はともに説得力をもっているといえるだろう。

4　ロレンツォ・イル・マニフィコの貴石製容器

ロレンツォは多くの貴石製容器を所有していたが，なかでも一，二を競う名品が，赤縞瑪瑙製の《水差し（ボッカーレ）》（銀器博物館）である[16]。1492年の財産目録では素材と形状が評価されて2000フィオリーノという高い評価額がつけられている。珍しい形状はササン朝ペルシアの文化圏のもので，とくに同じ石材の把手に刻まれたヒョウ（のちに翼が加えられたのでドラゴンに見える）と細かい葉状文様の図柄が7世紀頃のササン朝の図柄と同じである。水差しの形状は正倉院にある漆胡瓶や白瑠璃瓶とも比定できるだろう。15世紀の金属装飾も特異で，頸部をとりまく金具の下部のパルメット（椰子の葉の団扇）文様と二重螺旋はヴェロッキオ風である。蓋のつまみは，前述した赤碧玉製の《2つの把手と蓋のある壺》とよく似ている。

古さという点では，水晶製の《把手付き水差し（ブロッカ）》（銀器博物館）もなかなかのものである[17]。注ぎ口に透かし彫りの金装飾がわずかに残るこの水差しは，10世紀のファーティマ朝にさかのぼる。ファーティマ朝は現在のチュニジアに建国され，新都カイロを築いた王朝である。胴部には駝鳥が彫られ，肩の部分にはアラビア語で「指揮官のなかの指揮官へ，個人的に」と彫られている。

このような透明な水晶製品は一見ガラス製品に見えるし，天然の水晶と人工のガラスは，英語でもイタリア語でも「クリスタル」「クリスタッロ」という同じ語である。しかし，ローマ帝国滅亡後にガラスを彫刻する技術はほとんど失われ，当時のイタリアには技術はまだ復活していない。現代人には水晶を彫るほうが難しそうに思えるが，じつはそうではなかったのだ。ファーティマ朝では紅海に面する鉱脈から水晶を採掘していたし，ヨーロッパでもアルプス山脈とカルパティア山脈で鉱脈が発見されていた。水晶は透明性がことに愛好された素材であるが，素材自体はさして珍しくはなかったの

無断転載禁止

だ。

水晶よりも格段に稀少な素材が翡翠である。15世紀のメディチ・コレクションのなかで現存する翡翠製品は《杯（コッパ）》（銀器博物館）の1点だけである[18]。しかもこの透明感のある美しいオリーヴ・グリーンの杯は15世紀のティムール朝で製作されたと推定されているから，よけいに心をうばわれる。15世紀のティムール朝は，首都サマルカンドに翡翠製作工房があって高度なイスラーム文化を開花させたが，夢のようにはかなく姿を消した神秘の帝国である。現在の国名に「スタン」がつく地域が領土だった。中央アジアでは翡翠の杯に毒酒をもると毒に反応して杯が破壊されると信じられていたので，逆に壊れない翡翠の杯ならば安心して酒が飲めたのだ。イタリアのある研究者は「残念ながら金属装飾は失われた」と述べているが，素材そのものを愛でるという観点からすれば，金属装飾はないほうがよい。シンプルさの衝撃である。

黄色い虎斑のある碧玉製の《蓋付き杯（ビッキエーレ）》（銀器博物館）も印象的である[19]。堂々として，なおかつエレガントな器と装飾は，15世紀前半のブルゴーニュ製と推定されている。3個の球をつかむ動物の3本脚が支える脚部は他のどの作品とも似ていない独特なものである。何人かの研究者は最高傑作のひとつに数えているが，1492年の財産目録では200フィオリーノと予想外に評価は低い。

紫水晶製の《蓋付き杯（コッパ）》（銀器博物館）も堂々としている[20]。杯はおそらくは15世紀フィレンツェの工房で製作されたものであり，蓋はダイヤモンド，指輪，メディチ家の紋章で装飾されている。メディチ家の紋章の玉の1個は青地に百合の花があしらわれている。

碧玉は大別すると赤碧玉，緑碧玉，黄碧玉の3種類があるが，緑碧玉の名品が《蓋付き杯（コッパ）》（銀器博物館）である[21]。ただしこれを黄碧玉とする研究者もいて，黄と緑のまだら模様は見え方が微妙である。確かなことは，下層の碧玉は暗緑色と褐色のまさる高品質であるが，上層すなわち蓋の碧玉は赤，ピンク，グレー，白が混ざって低品質だということである。貴石と装飾は，どちらも15世紀のフィレンツェ製である。石の形状は比較的単純で初歩的なものであるが，同時代の技術が「古代風」と見まがうレベルにまで到達したことを示している。

古代品に目を移すと，赤縞瑪瑙製の《蓋付き壺》（銀器博物館）はさすがに壺の彫りが凝っている[22]。ふっくらとした胴部には凸状の一枚葉が点々と配され，やや細くなった頸部にはサヤマメ模様がぎっしりと並んでいる。この凸状の一枚葉の模様が典型的な古代ローマ様式である。15世紀のフィレンツェで追加された金属装飾は双葉模様と炎の模様である。

同じく赤縞瑪瑙製の《2つの把手のある蓋付き壺》（銀器博物館）[23]は，色あいがとびぬけて美しい。高さ45センチの壺の細長い形状がローマ帝国時代の1世紀から4世紀の様式であり，とくに細い把手に古代の高度な彫りの技術がみられる。銀製の台座は，メディチ家の紋章にトスカーナ大公冠が確認できることから，1570年以後，おそらくは第2代トスカーナ大公フランチェスコ1世時代に製作されたものと考えられる。頂部の洋梨形の装飾は19世紀に追加された。

最後に美しい中世の3点の杯を紹介しておきたい。まず紅縞瑪瑙製の《杯》（銀器博物館）[24]。この杯はビザンティン文化圏で10世紀から11世紀頃に製作された。失われた銀製の蓋は，メディチ家の紋章とダイヤモンドの付いた指輪，月桂樹，駝鳥の羽が付いていたことから，ロレンツォ時代の1469年から1492年に製作されたことがわかる。次に赤碧玉製の《杯》（銀器博物館）[25]。この杯の製作はローマ帝国末期説，ビザンティン帝国の10世紀から11世紀説，ブルゴーニュ地方の14世紀説などがあったが，古代風を模したヨーロッパのどこかの中世の作品らしい。台座の楕円形にメディチ家の紋章や「SEMPER（永遠）」というロレンツォのモットーが記されている。最後に，紫水晶の混ざっ

た碧玉製の《杯》(銀器博物館)[26]。この石の特徴は複数の貴石が混ざりあっていることで，複雑で微妙な色合いをかもし出している。この稀少な石の杯の製作も，古代ローマ，ファーティマ朝，古代風の中世など諸説があるが，最新の研究にしたがって，皇帝カール4世すなわちベーメン王カレル1世(在位：1346-78)が開いた採石場から切り出された，14世紀後半のプラハ周辺説をとっておきたい。炎をかたどった鍍金の銀製装飾はロレンツォ時代のものである。

以上，ピエロとロレンツォの貴石製容器の列記からわかることは，容器の製作は時代的には古代ローマから15世紀まで，地理的にはヨーロッパから中央アジアや北アフリカまで幅広いことである。この幅広い多様性とは逆に，すべてに共通することが2つある。第1は，すべてにロレンツォの所有を示すラテン語の略号「LAV. R. MED.」の銘が大胆に彫り込まれていることである。彼の並外れた所有欲の強さをうかがわせる銘である。この「R.」は「REX」つまり「王」を暗示すると伝統的に解釈されてきたが，近年，異説が提出されていまだ確定していない。さらに，この「LAV. R. MED.」の銘が入れられた場所はてっきりフィレンツェだと思い込んでいたが，じつはこれにもパリ説など諸説があり，現在ではヴェネツィア説が有力だというから意外である。フィレンツェ人に技術がないならば，パリ人だろうがヴェネツィア人だろうが職人を招けばすむ話ではないかと考えがちだが，どうやらそうではなかったらしい。よく見るとわかるが，この銘の精緻な彫りは神業に近い非常に高度な技術をもった同一人物または同一工房の仕事である。このような神の手をもつ熟練工をパリ政府やヴェネツィア政府がやすやすと手放すはずはなく，銘の必要な作品の側が出向いていった可能性は十分にありうる。「R.」の謎と場所の謎は，今後も当分は新説が提出されて議論がつづく問題であろう。

さらに共通する第2の点は，すべてが1532年に教皇クレメンス7世によってフィレンツェのサン・ロレンツォ聖堂に寄贈され，しかもすべてがなんと聖遺物容器として使用されたことである。たとえば，前述の《水差し(ボッカーレ)》は「聖アンデレの聖遺物容器」となったし，《2つの把手のある蓋付き壺》には「殉教者聖アナスタシウスの腕」，《杯》には「聖マグダラのマリアの顎骨全部と髪の毛数本」が収納された。現在は，聖遺物は取り除かれ，すべて銀器博物館にあるので，かつて聖遺物容器だったことを想像するのは難しい。1532年の聖遺物容器については改めて後述する。

しかし1532年以前の履歴となると不明な点が多い。一部は，すでにロレンツォの生前，彼の次男ジョヴァンニ(のちの教皇レオ10世)が13歳という異例の若さで枢機卿になった1489年以降にローマに送られた可能性がある。この少年は教会法を学んでいなかったし，スキャンダラスな若さだったので，もう3年間(1492年のロレンツォの死の直前まで)は正式な叙任が公表されなかった。また別の一部は1494年の追放後にヴェネツィアやローマに四散したり，消失したりした。いずれにせよ，メディチ家の手許に残った容器は，教皇レオ10世を経て教皇クレメンス7世の手に渡った。ロレンツォが教皇インノケンティウス8世(在位：1484-92)と親しくしたおかげで，ロレンツォの次女マッダレーナ(1473-1519)を教皇の庶子フランチェスケット・チーボと結婚させ，次男ジョヴァンニを枢機卿に登位させておいたことが，のちにメディチ・コレクションが存続する重要な布石となったのである。

1492年の財産目録によれば，ロレンツォが所有していた貴石製容器は合計33点，その評価額の総計は2万1318フィオリーノにのぼる。水晶製が10点で2020フィオリーノ，碧玉製が10点で6610フィオリーノ，碧玉・紫水晶製が2点で450フィオリーノ，碧玉・赤縞瑪瑙製が1点で150フィオリーノ，碧玉・玉髄製が1点で200フィオリーノ，碧玉・玉髄・紫水晶製が1点で150フィオリーノ，赤縞瑪瑙製が1点で600フィオリーノ，瑪瑙製が1点で400フィオリーノ，瑪瑙・赤縞瑪瑙製が1点で700フィオリー

無断転載禁止

ノ，玉髄・赤縞瑪瑙製が1点で8フィオリーノ，紫水晶製が1点で20フィオリーノ，斑岩製が1点で10フィオリーノなどである[27]。最初に紹介した赤縞瑪瑙製の《水差し（ボッカーレ）》の2000フィオリーノという数字が，いかに高額かが理解できるだろう。

5　コジモ・イル・ヴェッキオとピエロ・イル・ゴットーゾの彫玉

彫玉（ジェム）というのは，浮き彫り（陽刻）を施す「カメオ」と沈み彫り（陰刻）を施す「インタリオ」の総称である。「カメオ」はそのまま手に取って愛玩したり，ペンダントにしたりするが，「インタリオ」は凸凹が反転しているので，愛玩用はもちろん，粘土などに押し付けて形を残す印章としても使用された。数センチと小型で軽量なので，火急の際に何百枚，何千枚の金貨を持ち運ぶよりもはるかに運搬が容易な可動資産という投資的な側面もあった。さらに古典研究で得られた知識が可視化された形で表現されているのだから，その所有は権力と財力，学問と芸術の所有の象徴ともなった。

コジモが建てたラルガ通りのメディチ邸の開放的な中庭にめぐらされたフリーズに8点の大理石製円形浮彫がはめ込まれているが，この8点のうちじつに7点までが古代彫玉からモチーフを借用している。すなわち《ディオメデスとパラス像》《ダイダロスとイカロス》《アテナとポセイドン》《ディオニュソスとサテュロス》《凱旋車に乗るディオニュソス》《ケンタウロス》《ナクソス島のアリアドネ》である[28]。

このうち《ディオメデスとパラス像》は，現在，石膏やブロンズの複製が存在するだけでオリジナルは失われてしまったが，来歴がわかるおもしろい例である。書籍商ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチが語るところによれば[29]，古代遺物の熱狂的な蒐集家であるニッコロ・ニッコリが町でたまたま見かけた少年の首に玉髄製のカメオがぶらさがっていた。このカメオはポリュクレイトス作だと書籍商は述べている。カメオの真価を見抜いたニッコロは少年の父親を探し出して5フィオリーノで購入したが，作品の値打ちがわからない父親は十分に満足した。これを耳にしたアクィレイアの総主教で枢機卿のルドヴィーコ・スカランピがニッコロから200ドゥカートで購入した。裕福でないニッコロもこの金額で満足した。総主教の死後，古代彫玉の蒐集家として名高いヴェネツィア人ピエトロ・バルボのちの教皇パウルス2世（在位：1464–71）が1457年にカメオを入手し，その死後，1471年にロレンツォ・イル・マニフィコの所有に帰した。ロレンツォが死去した1492年の財産目録には，1500フィオリーノの評価額がつけられた。つまり，わずか60年ほどのうちに価値が300倍にも高騰した計算になる。

さて，7点のうち《ダイダロスとイカロス》《アテナとポセイドン》《ディオニュソスとサテュロス》の3点は1462年までメディチ家の所有に入っていない。《凱旋車に乗るディオニュソス》《ディオメデスとパラス像》の2点は1471年に教皇パウルス2世の遺品からメディチ家が獲得した。《ケンタウロス》の1点は1492年にメディチ家の所有に加わった。最後の1点《ナクソス島のアリアドネ》はゴンザーガ家の所有だった。ところがこの中庭の円形浮彫は，1452年，マーゾ・ディ・バルトロメオによって制作され，同年7月2日に報酬が支払われている。ということは，これらの彫玉はメディチ家が入手する以前からすでに有名であり，素描や複製が出回っていたことになる。

コジモは数点の彫玉しか持っていなかったが，ピエロは点数を増やした。それでもピエロ時代の1456年の財産目録には21点，1465年の財産目録でも30点しか記載がない[30]。先ほど名前をあげた同時期の教皇パウルス2世が所有していた彫玉が821点（カメオ243点，インタリオ578点）[31]という膨大な数だったのに比べると，はるかに少ない。とはいえフランチェスコ・ゴンザーガ枢機卿やフィラレーテによれば，ピエロは彫玉を愛好する目利きの鑑定家だった。ピエロの古代カメオへの関心は財産目録からも

無断転載禁止

明らかであり，たとえばピルゴテレス作とされるカメオ《アテナとポセイドン》（ナポリ，国立考古学博物館）は，1465年に180フィオリーノの評価額がつけられているし，皇帝フリードリヒ２世（在位：1220-50）の宮廷で1250年頃に製作された中世のカメオ《ノアの箱船》（ロンドン，大英博物館）は最高額となる300フィオリーノと評価されている。1492年の財産目録になると，それぞれ800フィオリーノ，2000フィオリーノと評価額が急上昇しているのは，15世紀後半に彫玉自体の価値があがったことを反映している。先に紹介したキリスト教の至宝《リブレット聖遺物容器》が，1465年に1500フィオリーノ，1492年にも1500フィオリーノと依然高い評価額であるにもかかわらず横ばいだったのとは対照的である。

6　ロレンツォ・イル・マニフィコの彫玉

メディチ家の彫玉コレクションが飛躍的に増大するのは1471年のことである。その年，ピエロの長男で22歳の若きロレンツォは，デッラ・ローヴェレ家出身の教皇シクストゥス４世（在位：1471-84）の即位式に出席するために特使としてローマにおもむいた[32]。システィーナ礼拝堂を建設することになる教皇であり，「システィーナ」とは「シクストゥスの」という意味である。この教皇は甥を６人も枢機卿に叙任しているが，システィーナ礼拝堂の天井画をミケランジェロに描かせることになるのは，その甥のひとりの教皇ユリウス２世（在位：1503-13）である。

教皇シクストゥス４世は1478年にはパッツィ家陰謀事件でロレンツォと対立することになるが，即位のときはそんな予兆もなくロレンツォ一行はおおいに歓待された。この教皇は若いときに神学を学んでイタリア各地の大学で教鞭をとっていたほどだから，異教の遺物には価値をおいていなかった。この機会に前任教皇パウルス２世の膨大な遺品を二束三文で売り飛ばした。ロレンツォは喜々として購入し，満足して帰国の途についた。

ロレンツォは「覚書」のなかで，フィレンツェに持ち帰った大理石製の「アウグストゥス」の頭部像や「アグリッパ」の頭部像など数々の古代遺品のなかでも，ある１点について「われわれの皿（ラ・スクデッラ・ノストラ）」と記して，あたかも先祖伝来の家宝のように特別扱いをしている。それは通称《ファルネーゼの皿》（ナポリ，国立考古学博物館）のことである。この直径20センチの玉髄製の皿は，紀元前１，２世紀にプトレマイオス朝エジプトの首都アレクサンドリアで製作されたヘレニズム時代の傑作である。ロレンツォ以前の所有者の可能性がある人物には，アウグストゥス帝，コンスタンティヌス帝，皇帝フリードリヒ２世（1239年に1230金オンチャでプロヴァンスの商人から購入），ナポリ王アルフォンソ・ダラゴーナ，教皇パウルス２世と錚々たる名前が並ぶ[33]。その後は，後述するように，アレッサンドロ・デ・メディチの寡婦マルゲリータの再婚先のファルネーゼ家の所有に帰したために，現在はこの通称で呼ばれている。

《ファルネーゼの皿》の両面には精妙な彫りが施されており，凹面にはスフィンクスやイシスとホルスなど８体が確認されるが，左の老人は河神ナイルか冥界の神ハデスかあるいは別の神か現在でも解釈が確定していない。難解な主題にメディチ・サークルの知識人たちも頭を寄せあって解読の議論に熱中したことだろう。一方，凸面（ということは机に置いたときに隠れる底面）はメドゥーサの頭部である。蛇の髪の毛をふり乱すメドゥーサの解読は簡単であるが，画面いっぱいに表現されているので衝撃的である。この皿がもともと宗教儀式用だったことを推測させるに十分な迫力である。

1492年の財産目録では，この皿はロレンツォの宝物室「スクリットイオ」に収納され，「赤縞瑪瑙・玉髄・瑪瑙製の皿１点。なかに数人の人物，反対側にメドゥーサの頭が表されている。重さ２リッブラ６オンチャ。１万フィオリー

無断転載禁止

ノ。」[34] と記されている。他の部屋に飾られたドナテッロの作品が25フィオリーノ，カスターニョの作品が15フィオリーノ，フィリッポ・リッピの作品が10フィオリーノと評価されているのに比較すると，この最高額の彫玉が異次元の驚異品と見なされていたことが理解できる。

この皿のほかにも，ロレンツォが獲得した古代彫玉には，マルクス・アウレリウス帝お抱えの彫玉師ソストラトス作の銘がある愛らしいカメオ《ギャロップする2頭の馬を駆るニケ》（ナポリ，国立考古学博物館）がある。この作品の図像は15世紀後半の知識人や芸術家たちに霊魂の不滅性の寓意的表現として解釈された。

ロレンツォ時代にメディチ邸を訪問した君主には，ミラノ公ガレアッツォ・マリア・スフォルツァ（1444-76），マントヴァ侯フランチェスコ・ゴンザーガ（1466-1519），ウルビーノ公フェデリーコ・ダ・モンテフェルトロ（1422-82）などがいたが，ロレンツォ死後の1495年2月にメディチ邸を訪問したミラノ出身の宝石細工師で蒐集家のカラドッソはミラノ君主ロドヴィーコ・スフォルツァ（1451-1508）に宛てた手紙で，「その日，私は皿を拝見しました。別の機会には，その皿といっしょに他の逸品を見せてもらいましたが，それは玉髄製のネロの印璽とパエトンの凱旋車です。」と興奮気味に伝えている。目にするだけでも貴重な体験だったのだ。ここにはメディチ家の彫玉でもとくに重要な《ファルネーゼの皿》《ネロの印璽》《パエトンの凱旋車》の3点が登場する。

《ネロの印璽》というのは，紅玉髄製のインタリオ《アポロンとマルシュアスとオリュンポス》（ナポリ，国立考古学博物館）のことで，作者はアウグストゥス帝に仕えたギリシア人彫玉師ディオスクリデスに帰されている。これが《ネロの印璽》と通称されるのは，ロレンツォ・ギベルティが「コンメンターリ」のなかで，1428年頃にコジモのために「ドラゴン」の形をした金製縁飾りに「ネロ」の名前を刻んだと記したことに由来する。現在，ギベルティの縁飾りは消失したが，このインタリオを再現したブロンズ製浮彫が数点現存しており，ギベルティが言及した縁飾りのラテン語銘文と一致することから，これらは原作に忠実な複製だと考えることができる。この作品の図像について，ギベルティは3世代を表す「3人の人物」と記すだけであるが，ヴァザーリは「アポロン」と「マルシュアス」と正しく特定しており，2人の神話にたいする知識の深浅をはかることができる。これはオウィディウスの『変身物語』を読んだかどうかという問題である。『変身物語』によれば，マルシュアスは笛でアポロンの竪琴に挑戦して敗北し，木に縛られたま生皮をはがれた。

《パエトンの凱旋車》（ナポリ，国立考古学博物館）は，前1世紀の古代ローマの作品で，1487年にロレンツォがルイージ・ロッティ・ダ・バルベリーノと価格をめぐって押し問答したあげく，ローマの商人兼蒐集家ジョヴァンニ・チャンポリーニの仲介によって150ドゥカートで手に入れた品である。この一例のように，ロレンツォは高すぎる場合には値切ることもあったし，購入をあきらめることもあった。

《アポロンとマルシュアスとオリュンポス》および《パエトンの凱旋》は，1492年の財産目録でともに1000フィオリーノという高い評価額がつけられており，《ファルネーゼの皿》を別格とすると，彫玉で1000フィオリーノを超える5点中の2点である（他は《ノアの箱船》《ディオメデスとパラス像》《凱旋車に乗るディオニュソス》）。5点はいずれも3センチから5センチ程度の小さいものだが，すべてに「LAV. R. MED.」の銘が刻まれており，ロレンツォの執拗なまでの所有欲と強烈な自己顕示欲をうかがわせる。この銘の入った彫玉は43点ある。だが，さすがに《ファルネーゼの皿》には手をつけるのがためらわれたらしく，銘を入れていない。

《パエトンの凱旋車》は古代品ではなく同時代の写しとする説もあり，ロレンツォは美麗なものであればどちらも愛好した。実際，彼はアントニオ・ダ・ピサやピエロ・ディ・ネーリ・ラッザンティら多くの彫玉師をフィレンツェに

招聘し，1477年にはラッザンティにカッティング技術の指導を条件に免税特権まで与えている。彼らに古代品を修復させたり，模倣させたり，新作を作らせたりして，ボッティチェッリなど，15世紀後半のメディチ家周辺の芸術家にさまざまなインスピレーションを与えた。

ピエロ・ディ・ネーリ・ラッザンティの弟子のひとりに名匠ジョヴァンニ・ディ・オーペレがいるが，このジョヴァンニがジョヴァンニ・デッレ・コルニオーレと呼ばれたのは，とくに紅玉髄（コルニオーレ）のカッティング技術に秀でていたからである。このジョヴァンニ・デッレ・コルニオーレがフィレンツェの記録に初出するのは1498年だから，すでにロレンツォが亡くなった後のことである。

ピエロ時代の1465年の財産目録で30点だった彫玉は，ロレンツォが亡くなった1492年の財産目録では75点に増えている[35)]。

その1492年の財産目録には，調度品や美術品や工芸品などをすべてあわせて総額7万5500フィオリーノにのぼる総数約4000点が記載されている。このうち「スクリットイオ」1室に納められた358点だけで総額の70パーセント以上に相当する5万3413フィオリーノの価値があり，この小部屋の宝物室としての重要性がきわだって高いことを物語っている[36)]。しかしながら「スクリットイオ」にあった3000フィオリーノの「ペンダント」や2200フィオリーノの「ブローチ」など[37)]，数多くの宝物が失われたことは，かえすがえすも残念である。

7　メディチ家の追放と帰還

1492年4月8日，ロレンツォはカレッジの別荘において43歳の若さで逝去した。死の床では治癒力があると信じられていたエメラルドと真珠を粉末にして飲んだ。臨終に立ち会ったアンジェロ・ポリツィアーノによれば，ロレンツォは今際のきわに彫玉や真珠のちりばめられた銀製の十字架に接吻をした。息絶えた瞬間にも永遠の生命を宿す宝物に触れていたのだ。彼の死に先立って暴風が吹き荒れたが，これはロレンツォが所有していた指輪のひとつから解き放たれた悪魔の仕業に違いないと，フィレンツェの人びとはまことしやかにささやきあった。

イタリア諸国のバランス・オブ・パワーを維持した偉人を称えるために，ベッドの遺体から石膏で鋳型をとった《ロレンツォのデスマスク》（銀器博物館）が製作された。16世紀初頭に作られた木製パネルの下部に書かれた詩句は，伝統的にポリツィアーノ作とされる短詩「マニフィコ・ロレンツォ・デイ・メディチの死に際し」の最後の数行である。「むごい死が/この肉体を襲った/彼が生きているあいだ/平穏に保たれていた世界は/その死後/混乱におちいった。」

ロレンツォの死から2年後の1494年，フランス王シャルル8世の大軍がアルプスを越えてイタリアに侵攻してくる。ロレンツォの22歳の長男ピエロ・イル・ファトゥオが対応をあやまると，市民は蜂起してメディチ家を追放する。結局，ピエロは2度と祖国に戻れず，小競り合いのさなかに川に落ちて溺死することになる。

同年11月17日，フィレンツェに入城したシャルル8世はメディチ邸に本拠をかまえ，「ピエロ所有のメダル，カメオ，磁器」を求めて探し回ったが，戦果はわずかしかなかった[38)]。すでに彫玉《ネロの印璽》《パエトンの凱旋車》《ディオメデスとパラス像》など宝物の一部はピエロが持ち去っていたし[39)]，他の一部は市内の各所（サン・マルコ，ムラーテ，サン・ロレンツォなどの修道院）に隠され，他の一部は市民が略奪していたからである。メディチ家の家財を没収した共和国政府は，1495年にオルサンミケーレ聖堂で競売にかけた。ヴェネツィアに逃亡したピエロは，10万ドゥカートの財産を奪われたと（やや誇張して）嘆いた。

メディチ家のために宝物を奪還しようと奔走したひとりは，メディチ派のロレンツォ・トルナブオーニ（1468–97）である。彼は貴石製の容器（壺）27点を実際よりも格安で買い戻し，市内の各所に隠されていた宝石や彫玉（《ファルネーゼの皿》を含む）も手に入れて，少なくと

無断転載禁止

も22点の壺を含む宝物類をローマのジョヴァンニ枢機卿（のちの教皇レオ10世）に発送した。4点の壺はフィレンツェのネルリ家が保管した。ところがロレンツォ・トルナブオーニは，買い戻しの際に不正な裏工作をはたらいた罪で，1497年に共和国政府によって処刑された。命をかけた宝物争奪戦だったのだ。

メディチ家の宝物を狙っていたのは，フランス王やメディチ家やメディチ派だけではない。ミラノ君主ロドヴィーコ・スフォルツァやマントヴァ公爵夫人イザベッラ・デステも獲得に興味を示した。イザベッラは1502年にネルリ家所有の壺を購入しようと考え，レオナルド・ダ・ヴィンチに相談をもちかけた。このときイザベッラは水晶製水差しを望んだが，レオナルドは碧玉製水差しを勧めている[40]。

ローマではメディチ家が3000ドゥカートを借り受ける担保としてローマ在住のシエナ人銀行家アゴスティーノ・キージ（1465-1520）に宝物を預けた。1495年から1512年まで，メディチ・コレクションのかなりの部分（167点以上）はキージ銀行に保管されて，ローマの芸術家に多大なインスピレーションを与えた。

1494年から98年までフィレンツェ共和国を支配した厳格なサン・マルコ修道院長ジローラモ・サヴォナローラの肖像は，前述のジョヴァンニ・デッレ・コルニオーレ作の紅玉髄製《ジローラモ・サヴォナローラの肖像》（銀器博物館）に見事に表現されている。コルニオーレは同時代人の肖像を明晰な線刻で製作したことで比類ない名声を博した彫玉師である。この作品は1565年になってコジモ1世が購入した。

1512年にメディチ家がフィレンツェに復帰し，1513年にメディチ家出身の教皇レオ10世が37歳という史上最年少の若さで登位した。ジョヴァンニ・デッレ・コルニオーレは，1513年にメディチ政府から紅玉髄製の印璽《ヘラクレス》の製作を受注したが，作品は消失した。その印璽におそらく似ていたはずの作品は，1532年にドメニコ・ディ・ポーロが受注したエメラルド製の印璽《ヘラクレス》（銀器博物館）である。ヴァザーリはドメニコ・ディ・ポーロを「彫玉技術の名匠」で，ジョヴァンニ・デッレ・コルニオーレの弟子と紹介している。このポーロ作の《ヘラクレス》はのちにコジモ1世が印璽として使用することになる。

ラファエッロのパトロンでもある教皇レオ10世の時代に製作されたと考えられる神話主題の作品がある。《ヴィーナスとクピド》（銀器博物館）である。ヴィーナスは左側に鳥を，右側に息子のクピドを手にしている。クピドはもともと両手に矢を握っていたはずである。この作品には，ペシア出身のピエル・マリア・セルバルディ（1455頃-1520）の名がギリシア語で彫られている。彼は1509年からローマに住み，教皇レオ10世に仕えた彫刻家である。高さ26センチと小ぶりながら堂々とした風格があり，おそらくは古代遺跡から切り出したエジプト産の赤色斑岩製の彫刻である。古代の石材と16世紀の技術が結合しているのだ。素材と主題の点でルネサンスを代表する珠玉の小品と見なしてもさしつかえないだろう。

浅浮彫の《レオ10世の肖像》（銀器博物館）も，教皇自身が発注し，セルバルディの作であることはほぼ確実である。教皇レオ10世時代の1517年にルターの宗教改革が起こったが，教皇はルターを破門しただけで，危機の本質を認識することはできなかった。

8　教皇クレメンス7世，アレッサンドロ公，カトリーヌ・ド・メディシス

メディチ家出身の教皇クレメンス7世時代の1527年5月，ルター派の多い皇帝軍によるローマ劫略が起こると，同年同月にメディチ家がふたたびフィレンツェから追放され，またもやローマとフィレンツェのメディチ・コレクションは四散した。この時期に宝物の一部を保管したひとりは，のちにシニョリーア広場に《ヘラクレスとカクス》を作ることになる彫刻家バッチョ・バンディネッリである。

無断転載禁止

1530年8月12日，10カ月にわたる包囲戦の末に最後のフィレンツェ共和国が陥落した。1531年7月6日に教皇クレメンス7世の庶子アレッサンドロ・デ・メディチが皇帝カール5世から初代フィレンツェ公の称号を授与され，フィレンツェの支配者として帰還する。弱冠20歳。公的にはピエロ・イル・ファトゥオの長男ウルビーノ公ロレンツォ（1492-1519）の庶子，つまりカテリーナ（カトリーヌ）の兄として育てられたが，実際は教皇の庶子であることは誰もが知っていた。生母はムーア人だったようで，浅黒い肌と粗暴な性格のために，フィレンツェ人からは「イル・モーロ（ムーア人）」と陰口をたたかれた。だが1536年には皇帝カール5世の庶出の娘マルゲリータと結婚して皇帝との絆を強める。アレッサンドロ公は共和制のシンボルである政庁舎の大鐘を溶解して自分の肖像のメダルを多数鋳造させた。チェッリーニ作の銀貨《アレッサンドロ･デ･メディチ》には「フィレンツェ共和国公爵アレンサンドロ･デ･メディチ」のラテン語の銘がある。コインやメダルのプロフィールに似ているのは，ドメニコ・ディ・ポーロ作の鍍金カメオ《アレッサンドロ・デ・メディチの肖像》（銀器博物館）や玉髄製カメオ《アレッサンドロ・デ・メディチの肖像》（銀器博物館）である。

アレッサンドロ公のインプレーザの《犀》（パラッツォ・ヴェッキオ）についても触れておきたい。ローマ帝国以来ヨーロッパに来た最初の生きた犀は，インドのグジャラート・スルターン朝からポルトガル王マヌエル1世（在位：1495-1521）に贈られたインドサイで，1515年5月20日にリスボンに到着した。同年，王はこれを教皇レオ10世に贈ろうとしたが船が嵐にあって沈没した。当時ニュルンベルクにいた画家アルブレヒト・デューラーは犀を実際に見たわけではないが，同年，ある素描から版画《犀》（ロンドン，大英博物館）を作り，彼の存命中だけでも数千枚が出回る大ヒット作となった。アレッサンドロ公のインプレーザはその1枚に基づいているのだ。両者の共通点は，あるはずのない背中の小さい角である。

ミケランジェロは包囲戦（1529-30）の最中は共和国防衛のために奮闘するが，それ以前とそれ以後は教皇レオ10世と教皇クレメンス7世の依頼によってサン・ロレンツォ聖堂でファサードやメディチ礼拝堂の仕事を断続的に継続した。教皇クレメンス7世の依頼でミケランジェロは同聖堂内に2本の柱にかこまれたキボリウム（祭壇天蓋）形式で「聖遺物のトリブーナ」を1525年に設計し，包囲戦の中断をはさんで，1531年から32年に建設した。これは聖遺物を年1回公開展示する特別な場所である。

1532年11月16日の勅令によって，教皇クレメンス7世は，前述したロレンツォ・イル・マニフィコの貴石製容器を含む45点の宝物をフィレンツェのサン・ロレンツォ聖堂に寄贈した。これを聖遺物容器として利用し，ミケランジェロ設計の「聖遺物のトリブーナ」に展示するためである。すでに同年4月27日にはアレッサンドロ公のメディチ君主制を世襲化する布告が出されていたので，メディチ君主制の確立と継続を確信したうえでの決断だった。

聖遺物容器をいくつか紹介すると[41]，たとえば《聖エリナの聖遺物容器》（サン・ロレンツォ聖堂）は，10世紀のファーティマ朝で作られた水晶製の透明な容器に15世紀のヴェネツィアで作られた金属装飾が付いている。高さ44．4センチと最大の《聖コスマスと聖ダミアヌスの聖遺物容器》（サン・ロレンツォ聖堂）も15世紀のヴェネツィアで作られた金属装飾が付いている。どちらもドラゴンの形の把手だが，前者の蓋には真珠，後者の蓋には飛び立つ鷲が付いている。同じ職人の手になると思われる《聖テオドシウスと聖バルトロマイの聖遺物容器》（サン・ロレンツォ聖堂）も，壺と蓋の両方に4体の有翼ドラゴンの金属装飾が施されて強烈なインパクトを与える。翼以外は明らかに中国の龍の形を模倣したものだ。《聖ニコラウスの聖遺物容器》（サン・ロレンツォ聖堂）に使用されている玉滴石は15世紀のヴェネツィア製であり，金属装飾は16世紀の初頭にローマで活躍した

無断転載禁止

フィレンツェ人金細工師が教皇レオ10世の命をうけて製作した可能性が高い。《聖アナスタシウスの聖遺物容器》(サン・ロレンツォ聖堂)はササン朝ペルシアで作られた水晶製容器にフィレンツェ人が金属の装飾を追加した。

じつのところ，上にあげた5点の聖遺物容器の聖人の名前は研究者のあいだでも異説がある。もともとあやしげな起源のあやしげな欠片なのだから，当然といえば当然なのかもしれない。ところが，教皇クレメンス7世が寄贈した聖遺物容器の中核ともいうべき《シエナの聖ベルナルディーノの衣の聖遺物容器》(サン・ロレンツォ聖堂)の内容物は本物かもしれない。聖人自身がイタリアのアクイラで1444年に死去し，1450年に列聖されたばかりであり，金属装飾の製作者はフィレンツェでも仕事をしたシエナ人金細工師フランチェスコ・ダントニオ(1440-80年に活躍)だからである。金属装飾のなかのラテン語の頭文字がロレンツォの所有だったことを示している。

父の教皇クレメンス7世が1534年に死去すると，横暴にふるまっていたアレッサンドロ公は，1537年1月6日，同じメディチ家出身のロレンツィーノに暗殺された。この突発事件でまたもコレクションは散逸の憂き目にあう。いちばん価値のある宝物の大部分を引き取ったのは，半年ほどの結婚生活ののちに寡婦となった15歳のマルゲリータだった。同年7月10日，マルゲリータはメディチ家所有のローマのパラッツォ・マダマに居を移したのにともなってコレクションの大半をローマに移した。そして翌年，教皇パウルス3世(在位:1534-49)の孫オッタヴィオ・ファルネーゼ(1521-86)と再婚した結果，通称《ファルネーゼの皿》を含むロレンツォの彫玉43点など多数の宝物がメディチ家からファルネーゼ家の所有に移った。そのファルネーゼ家が家系存続のために1735年にナポリに移住すると，コレクションも同時に運んだので，メディチ家の宝物とファルネーゼ家の宝物はいっしょにナポリにたくさんある。メディチ家旧蔵の彫玉は23点が現在ナポリの国立考古学博物館で確認されている[42]。

最後に16世紀初頭のメディチ・コレクションの最高傑作を紹介しておきたい。高さ15センチ，横幅27センチと意外に小さいが，銀メッキとエナメルで縁取りした水晶製浮彫パネルの古典的な風格をただよわせる《宝石箱》(銀器博物館)である[43]。これは16世紀でもっとも有名な彫玉師でヴィチェンツァ出身のヴァレリオ・ベッリ(1468?-1546)が，教皇クレメンス7世のために1530年から32年にかけて水晶パネルにキリストの生涯を彫り込んだ傑作で，1532年の年記がある。「東方三博士の礼拝」の場面にはキリンの姿も見える。教皇クレメンス7世はハプスブルク家の皇帝カール5世からその庶出の娘との結婚を勝ち取ることに成功したが，他方では，ヴァロワ家のフランス王フランソワ1世とも交渉してウルビーノ公ロレンツォの娘カテリーナ(カトリーヌ)とフランス王子アンリ(のちの国王アンリ2世)との縁談も取り決めた。ハプスブルク家とヴァロワ家が激闘をくりひろげたイタリア戦争の渦中のことであり，二重の政略結婚を通してバランスをとりつつ，メディチ家の国際的な地位を引き上げようとしたのである。教皇クレメンス7世が1533年の結婚に際してフランソワ1世に贈ったのがこの《宝石箱》である。身分違いの結婚というフランス側の悪評をおさえるためにも，豪華な嫁入り道具が必要だった。のちに王母となりサン・バルテルミの虐殺を指令するカテリーナだが，結婚当初の彼女の健気で可憐な面影を純白のカメオ《カテリーナ・デ・メディチの肖像》(銀器博物館)に見ることができる。14歳の花嫁ははるばる海を渡ってフランスに《宝石箱》を持参したが，やがてその愛孫クリスティーヌ・ド・ロレーヌ(1565-1637)が1589年に第3代トスカーナ大公フェルディナンド1世と結婚するためにフィレンツェに嫁いで来たときに，この《宝石箱》は里帰りすることになる。この結婚はカテリーナが死の床で取り決めた最後の大仕事だった。

注

1）A. M. Massinelli, F. Tuena, *Il Tesoro dei Medici,* Firenze, 2000, p. 23. 以下，*Tesoro*と略記。
2）J. R. Hale, *Florence and the Medici,* London, 1977; P. Bargellini, *Storia di una grande Famiglia: I Medici,* Firenze, 1980; U. Dorini, *I Medici e i loro tempi,* Firenze, 1982. 森田義之『メディチ家』講談社，1999年。
3）15世紀のメディチ家兄脈の財産目録は，M. Spallanzani（a cura di），*Inventari medicei 1417–1465,* Firenze, 1996; M. Spallanzani, G. Gaeta Bertelà（a cure di），*Libro d'inventario dei beni di Lorenzo il Magnifico,* Firenze, 1992；R. Stapleford（ed.），*Lorenzo de' Medici at Home*：*The Inventory of the Palazzo Medici in 1492,* Pennsylvania, 2013. 以下，Stapleford と略記。財産目録の研究は，N. Dacos, D. Heikamp et al., *Il Tesoro di Lorenzo il Magnifico,* Firenze, 1980. 以下，Dacos, Heikamp と略記。森田義之「ルネサンス期のコレクションと文芸庇護――ロレンツォ・イル・マニフィコの遺産目録」『月刊百科』362号，367号，1992–93年。
4）ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチ，岩倉具忠・岩倉翔子・天野恵訳『ルネサンスを彩った人びと――ある書籍商の残した「列伝」』臨川書店，2000年，365–366ページ。
5）Stapleford, p. 49; D. Kent, *Cosimo de' Medici and the Florentine Renaissance,* New Haven, 2000, p. 295; Dacos, Heikamp, p. 3.
6）D. Kent, *op. cit.,* p. 295.
7）M. Belozerskaya, *The Medici Giraffe and Other Tales of Exotic Animals and Power,* New York, 2006, pp. 91–93.
8）M. Scalini, 'La formazione del tesoro quattrocentesco, la sua dispersione e il ritorno a Firenze dei preziosi medicei' in C. A. Luchinat（a cura di），*Tesori dalle Collezioni medicee,* Firenze, 1997, pp. 29–30. 以下，Scalini と略記。
9）Scalini, pp. 30–34; L. Fusco, G. Corti, *Lorenzo de' Medici*：*Collector and Antiquarian,* New York, 2014, pp. 76–78. 以下，Fusuco, Corti と略記。秋山聰『聖遺物崇敬の心性史』講談社，2009年，134–136ページ，149ページ。
10）Scalini, p. 48.
11）Scalini, p. 34, p. 48.
12）*Tesoro,* pp. 40–41; AA. VV. *Il Tesoro dei Medici al Museo degli Argenti,* Firenze, 2009, p. 45. 以下，Museo と略記。
13）*Tesoro,* p. 42; *Museo,* p. 44; M. Mosco（ed.），*Meraviglie*：*Precious, Rare and Curious Objects from the Medici Treasure,* Firenze, 2003, p. 23. 以下，*Melaviglie* と略記。
14）Dacos, Heikamp, p. 174.
15）*Tesoro,* p. 23.
16）Scalini, pp. 37–38; *Tesoro,* pp. 42–43; *Museo,* pp. 40–41.
17）*Tesoro,* pp. 46–47.
18）Scalini, p. 38.
19）*Tesoro,* p. 46; *Museo,* p. 46.
20）*Tesoro,* p. 44–45; *Museo,* pp. 42–43.
21）*Tesoro,* pp. 34–35; *Museo,* p. 47.
22）*Tesoro,* p. 38; *Museo,* p. 34.
23）*Tesoro,* pp. 38–39; *Museo,* p. 36.
24）*Tesoro,* p. 34; *Museo,* p. 38.
25）*Tesoro,* p. 37; *Museo,* p. 39; *Meraviglie,* p. 24.
26）*Tesoro,* p. 36; *Museo,* p. 41.
27）Dacos, Heikamp, p. 174.
28）マリアリータ・カザローザ・グァダーニ，松本典昭訳「メディチ家の彫玉コレクション」『阪南論集　人文・自然科学編』第44巻，第2号，2009年，73–91ページ。西川しずか「15世紀メディチ家の古代彫玉蒐集――その社会的及び政治的意義」，遠山公一・金山弘昌編『美術コレクションを読む』慶應義塾大学出版会，2012年，89–110ページ。石鍋真澄『フィレンツェの世紀――ルネサンス美術とパトロンの物語』平凡社，2013年，346–371ページ。
29）ビスティッチ，前掲書，360ページ。
30）Dacos, Heikamp, p. 3.
31）Dacos, Heikamp, p. 4.
32）以下，*Il Tesoro*; T. Vanni, *Le gemme dei Medici e dei Lorena nel Museo Archeologico di Firenze,* Firenze, 1996; R. Gennaioli, *Le gemme dei Medici al Museo degli Argneti,* Firenze, 2007.
33）Fusuco, Corti, p. 128. 教皇パウルス2世が所有したことはないとする研究もある。*Tesoro,* p. 24. 皿については，M. Belozerskaya, *Medusa's Gaze, The Extraordinary Journey of the Tazza Farnese,* Oxford, 2012.
34）Stapleford, pp. 28–29.
35）Stapleford, p. 28. Dacos, Heikamp, p. 3 では76点。Fusuco, Corti, p. 106 では，コインは少なくとも5527点，貴石製容器は63点，彫玉は127点。
36）Dacos, Heikamp, p. 175.
37）*Tesoro,* p. 26.
38）Scalini, p. 44. マリン・サヌートの日記。
39）*Tesoro,* p. 27.
40）Scalini, p. 44.
41）以下，Scalini, pp. 45–46.
42）Dacos, Heikamp, p. 5.
43）「宝石箱」については次も参照。*Palazzo Vecchio,* p. 218.

無断転載禁止